

# 19世紀 小金井の桜浸透

## 文人の 武蔵野

享和年間（1801〜04年）に入り、小金井に桜が植栽されてから50年以上が経ちました。しかしまだ、「小金井の桜」が江戸中の評判となるには至りませんでした。

享和元年（1801年）3月に、小金井橋を訪れた屋代弘賢（將軍直屬の家臣であり国学者）が書いた「小金井橋にあそぶことは」には、「そも、川崎大人の花植えしより、年は五十余りも経ぬれど、誰知れる者無し」とあります。往来を通る商人などに小金井橋の方角を尋ねても、誰も詳

### 屋代弘賢



現在の小金井橋。周辺を多くの文人たちが訪れた（小金井市で）

しく知らない状況だったようです。注目されつつある様子ではありますが、まだまだ江戸の名所ではありませんでした。

享和3年（1803年）に成立したと考えられている「享和雜記」には、「小金井

の桜見事なる事は、炭附・下掃除に来る者どもの咄にのみ聞及びし処、近頃頃は江戸より花見に行く事となりぬ。府中宿の北に当り、間に月の名所也と申し伝ふる武蔵野を隔て、江戸より行程七里には近し。多摩川上水の流に傍て、両側に桜樹数十町植る置きたり。皆山桜なれば、盛り、早し。その戻り、井の頭弁天、大宮八幡へ廻るに少しのより道なれば、近頃、花の頃出る人多し」と記されています。

その翌年、文化元年（1804年）3月12日、桜見物のために小金井橋近辺を訪れた俳人の露庵有佐は、「武蔵野多磨郡金橋のほとりなる桜」を「世に知れる人稀なりけむ。やうやう、二年三年この方、ほのめかし聞え侍る」（「玉花勝覽」）と記しています。享和から文化にかけての数年で、その名が知られるようになった様子がわかります。

漢文学者の今浜通隆氏は、江戸町人の行動範囲が広がり、物見遊山や年中行事を楽しむ機会が増大した「化政文化」の影響もみられるのではないかと、としています。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。